

坂田近右衛門家文書目録と目録作成について

1 坂田近右衛門家文書は、旧蔵者の土蔵が解体されたころに故あって旧蔵者の手を離れ、東京神田の古書市場に展示された史料で、平成10年に東京の古書店から須坂市が購入し須坂市立博物館所蔵とした経緯がある。この時、須坂市誌編さん専門員丸山文雄によって目録化がなされている（現在の目録形式と若干異なる）。

また、平成25年10月には、同家文書が再度東京の古書店から『総合目録』（平成25年5月号）に紹介され売りに出された。この史料も須坂市が購入し、須坂市立博物館が所蔵するものである。こちらも、同専門員小林裕によって目録化がなされている。

2 1回目（平成10年）購入分の76点の同家文書は、江戸藩邸での生活の様子がわかる史料が多く、藩邸での生活にどのくらいの費用がかかり、どのくらいの人数の藩士や奉公人たちが江戸に出て仕えていたのかなどを知るうえで手掛かりとなる。藩財政逼迫の大きな要因となった江戸での藩主・藩士らの生活の一部を把握できるたいへん貴重な史料である。

2回目（同25年）購入分の同家文書は「追加分」として扱われてきたが、これらの史料310点も幕末期の須坂藩主・藩士らの生活実態を垣間見ることができる貴重な史料である。

今回の目録の再作成にあたっては編集の都合上、2回目購入分（追加分）の史料が前半部（史料番号1～155）に記載され、1回目購入分史料が後半部（同156～217）に記載されるという変則的なものとなっている。ご注意いただきたい。

3 坂田近右衛門については、いつの時代かは不明ながら塩野村（須坂市）の坂田家から須坂村へ出て居を構えたと伝えられる。

勝山忠三『上高井歴史』（大正4年12月2日）によれば、25俵取の下級藩士（幕末期）で、「買物方」「作事方」「賄方」を勤めたとある。近右衛門は、藩士らの俸禄（給料）や藩金の出納、さらに江戸藩邸の生活物資を購入及び支払いを担当し、それらを帳簿に記入作成する役職についていたことがこの史料群から知ることができる。

坂田家過去帳よれば、系譜は以下ようになる。

初代 积崇信	（明和5年生～天保5年8月10日没、66歳）	坂田近右衛門
积院住正定聚位	（享和2年生～明治8年没、73歳）	近右衛門（秀利養父）
皆徳庵积照道正定聚位	（生年不詳～明治31年5月19日没）	俗称秀利
信義庵积智遠正定聚位	（明治2年生～昭和12年4月15日没）	喜作

（丸山文雄『須坂藩士族 坂田近右衛門家史料』による）

4 目録作成にあたっては、上記のように2回に分かれて購入した史料群を「坂田近右衛門家文書」として、まとめる形で再作成した。

『須坂市域の史料目録』の連番整理番号「062」（62番目）に位置づけ、史料番号「062-1」からはじめて、整理番号を添付した。原則として年代順に配置したが、同じ系列のものは枝番号を付けるなどまとめて配置したものもある。

史料点数は、	前半部	史料番号	1 ～ 155 番	史料点数	310 点
	後半部	史料番号	156 ～ 217 番	史料点数	76 点
				前半・後半部合計総史料点数	386 点

- 5 本史料目録は利用の便宜を考慮して次のようにした。
 - (1) 史料名は原則として史料の表題を記載したが、表題のない史料は目録作成者が内容を検討し（ ）を用いて仮表題を記載した。
 - (2) 「記」などの表題で内容の適切な表示が必要な史料は、内容を概括して記載した。
 - (3) 史料形態については、横（横帳）、横半（横半帳）、縦（縦帳）、紙（一紙）、綴、束、などと記載した。
尚、一紙文書史料の整理の都合上「便宜束」としたものもある。
- 6 本史料が、須坂市民のほか多くの方々によって研究活用されることを望む。
前記のように、幕末期の須坂藩の藩主・藩士らの生活実態の解明に役立つ史料が多く、より一層の研究の深まりを期待する。
- 7 史料の整理及び文書目録の作成は、次の者がおこなった。

前半部（2回目購入分）	須坂市誌編さん専門員	小林 裕
後半部（1回目購入分）	須坂市誌編さん専門員	丸山文雄

さらに、再目録化については2回分の史料確認及び目録内容の検討のうえ、須坂市文書館専門員大塚尚三がおこなった。

2019年11月21日

須坂市文書館